



世界文化遺産登録に向けて

佐渡の金銀山史を彩る人々

○荻原重秀（おぎわらしげひで）
（1658～1713）

荻原重秀は通称を彦次郎といい、万治元年（1658）に旗本の荻原十助重種（たけしげ）の次男として江戸に生まれました。広く財政に通じ、貞享4年（1687）、勘定奉行に次ぐ地位である勘定頭差添役に就任しました。元禄3年（1690）に佐渡奉行に任命されると、生産量が落ち込んでいた佐渡金銀山の再生に努めました。元禄9年には佐渡奉行のまま勘定奉行を兼任し、近江守の称号を賜りましたが、当時の政事顧問であった新井白石との対立から、正徳2年（1712）に奉行職を失い、その翌年に江戸で亡くなりました。



▲相川下寺町本典寺にある荻原重秀の五輪塔（右）と乗秀の石塔婆（左）

遺骨は東京都台東区谷中の長明寺に葬られましたが、一説では絶食して自害したといわれ



▲南沢疎水道内部

でも造るべきである。近頃のの小判は（これまでのものより）粗悪であるが紙よりはマシだ

ています。なお、息子の乗秀も佐渡奉行を勤めましたが「享保19（1734）～20年」、在島わずか11か月で相川にて病死しています。相川下寺町の本典寺には、現在も父重秀の供養塔と息子乗秀の墓が並んで建っています。

○近江守様時代

荻原重秀といえば、日本史の教科書にも登場する有名人物で、質の悪い小判を铸造し、元禄時代の日本の経済を混乱させた張本人として知られています。しかし実際は、財政破綻寸前の江戸幕府の建て直しに努め、小判を単なる貴金属としてしかみていなかった時代に、「貨幣＝政府の信用に基づく交換品」という新たな経済システムを世界に先駆けて導入しようとした。貨幣は国家が造るもので、たとえそれが瓦であ



▲元禄小判（金約56%）慶長小判（金約86%）よりも粗悪であった。中央左に「元」の文字がみえる。

という名言を残しています。

佐渡奉行に赴任した重秀はまず、江戸から莫大な資金を投入し、南沢疎水道の掘削（元禄4年着手、同9年完成、同14年追加工事）や、鶴子・新徳・西三川等の諸鉱山の再開発を行いました。それにより産金量は一時的に回復しました。また、元禄6年（1693）には佐渡で初めてとなる田畑の実測検地を行い、島内の年貢は従来の2万3千石から4万5百石余にまで増加しました。増加分は佐渡金銀山再生費用に充てられました。また、農民の増税への反発を防ぐため、年貢の半分は時価の半額の銀で納めるといった巧妙な税制を実施しています。こういった政策により鉱山は活況を呈し、貨幣の流通が農村部にまで広がりました。

正徳3年（1713）の死去に際しては、相川下寺町の本典寺に供養塔が建てられ、盛大な法要が営まれたといえます。佐渡での手腕は高く評価され、荻原奉行支配の時代は「近江守様時代」と賞賛されています。

◆教育委員会 世界遺産・文化振興課

☎ 27-4170

山本修巳さん（真野新町）

平成20年度新潟県教育委員会表彰受賞



11月5日、佐渡市文化財保護審議会会長の山本修巳さんが新潟県教育委員会表彰を受賞されました。これは、県内の文化財保護に対する多大な功績を称えるものです。おめでとうございます。

1938（昭和13）年、真野新町に生まれる。現佐渡市文化財保護審議会会長、新潟県文化財保護連盟理事。季刊誌『佐渡郷土文化』を主宰する。主な著書『かくれた佐渡の史跡』『佐渡の方言』ほか著書多数